

## 「ドン・キホーテ」生誕 400 年

「二人の主人公」が現代に問いかけるもの

# あなたの”見果てぬ夢”は何ですか？

## 定年退職の熟年男 2 人「ラ・マンチャ道中膝栗毛」

本年はセルバンテスの「ドン・キホーテ」出版からちょうど 400 年。スペインの各地では記念の行事が行われている。「見果てぬ夢」を追って、定年退職した熟年男 2 人が現地に飛んだ。ラ・マンチャの舞台は今……。

文：清水 武

写真：井部昌之・清水武

## アルカーラ・デ・エナーレス

### 国王、首相も出席してセルバンテス賞の授賞式

旅は東京でのひよんな出会いから始まった。9 月半ば、信濃町でスペインのリナス親娘と出会った。二人は福岡にいる親戚を訪ねてきたのだという。話が弾み、私は 10 月初め、スペインを訪れる計画があることを伝えた。「ドン・キホーテ」出版 400 周年の取材旅である。と、娘のスサナさんが相好を崩して語りかけてきた。

「じゃあ、私の町に来なくちゃ。セルバンテス生誕の地よ。今、いろんな記念行事をしていてとてもにぎやかだわ」

「ラ・マンチャの舞台を訪ねて」当初、旅はマドリードのスペイン広場から始める予定だった。だが、彼女の思いがけない申し出に予定を変更、まずは“原点の町”アルカーラ・デ・エナーレスへその一歩を運んだ。



スサナさん(右)と父親

マドリードから東へバスで約 30 分。街に入ると車道の両側にはカラーのエンブレムがにぎやかに歓迎していた。「セルバンテスのドン・キホーテ 400 周年 作者の町：アルカーラ・デ・エナーレス市議会」。



中央のセルバンテス広場へ行く。ドン・キホーテとサンチョ・パンサの像の横にも大きな立看板がある。「10 月 1 日から 12 日までが記念期間です」。

東京から持参の携帯電話でスサナさんに連絡を取ってみる。電話口に出たのは母親だった。「すみません。娘はまだ大学から帰っておらないんです……」

それじゃあ“自力”でと、屋台が並ぶ公園内を歩き始めた。木陰のベンチに座っている 3 人の老人に声をかけた。

「なに、ハポン(日本)から？そりゃまあ遠いところからよく来てくれたもんだ。で、もうセ

ルバンテスの生家には行ったんかい？」

「まだ！？よっしゃ、じゃあワシが案内したるで・・・」

こう言って立ち上がった血色の良い好々爺。町の各地を説明しながら案内を始めた。初めて会ったばかりの外国人にこの親切！

ファン・モネデロさん。72 歳。マドリードの北方にあるグアダラハラ生まれ。アルカラに住んで 38 年になるという。

「どこにいたってワシは生粋のスペイン人なんだよ！」。大きな声に誇りをこめて言う。

セルバンテスの生家は 400 年の歴史をにおわす大きな 2 階建てだった。中庭を囲むように居間、食堂、寝室、家族また使用人の部屋があり、当時の生活用品がそのまま陳列されている。玄関前の歩道には、ドン・キホーテとサンチョ・パンサの像が置かれていて、観光客の記念スナップの場となっていた。

10 月 10 日には 1498 年創立のアルカラ大学の講堂で、セルバンテス賞の授賞式も行われた。スペイン語圏の作家にとって最高の荣誉である。これにはカルロス国王、ソフィア王妃、サパテロ首相も出席しその意義をとどめている。



後方がセルバンテスの生家

案内に感謝し帰りかけたところに、スサナさんの父親のカルロスさんが息せき切って駆け寄ってきた。

「スサナがまだ大学から帰ってこないで私が代わりに来たんじゃよ」。額の汗をぬぐいながら握手を求めてきた。あごひげの豊かな 61 歳。

セルバンテス広場とそこに通ずる道路は千人を超える人々でごった返していた。その中でよくぞ我々を探し出してくれたものだ！世界は狭い！普通なら不可能に近い再会の感動とスペインの熟年者たちの人の好さに、長旅の疲れも吹っ飛んだ。「東京のドン・キホーテ」の“見果てぬ夢”旅へのファンファーレとなった。

## マドリード・スペイン広場

### 主人公たちを見守るセルバンテス

スペイン広場。マドリード市内の最も人気のある観光スポットの一つである。大きな長方形の池を前にした広場中央の台座に、槍を掲げやせ馬口シナンテに乗ったドン・キホーテとロバにまたがったサンチョ・パンサの像がある。その後方の高い台座には、作者セルバンテスが小説の主人公二人を見守るように座っている。セルバンテス没後 300 年を記念して建てられた。

新聞や雑誌、観光案内書等にあまりにも頻繁に出てくるシーンなので、ここは最もアブ・トゥ・デートの写真の紹介だけにとどめよう。

ところで私事で恐縮だが、なぜ私がドン・キホーテなのかについて一言触れさせて

いただきたい。それは小学校の6年生までさかのぼる。学校の学芸会に、クラスで「ドン・キホーテ」の劇をすることになり、私がサンチョ・パンサの役を演じたのがきっかけだった。以来、その奇想天外なストーリーに惹かれて、少年向けの本を、大人になってからは全訳本を通読したものだ。

また10年ほど前、職場の近くにある日本スペイン協会で、スペイン文学の権威・長南実先生による原書の勉強会があった。何とか時間をやりくりして、週一回、一年余り出席した。更に、松本幸四郎がドン・キホーテを演ずるミュージカル「ラ・マンチャの男」も東京で何回も観劇した。

ドン・キホーテもだが、サンチョ・パンサの言葉もいい。

「人間寝てるうちは、身分の高え者も低い者も、貧乏人も金持ちもみんな同じでさ」(永田寛定訳)

「この世を捨て、地の下へもぐる段になったら、お大名も日雇もおんなじように窮屈な途を歩くだし、法王様のからだも聖器番のからだも、よしんば背たけに違いはあろうと、占める広さに変わりはない」

.....

二人の間でやりとりされる諺正義を求め、悪と戦うために槍  
ドン・キホーテは理想主義の典  
ヨ・パンサは物質主義の権化と  
セルバンテスは58歳のとき  
を出版した。その初版本の出版  
行われたのである。悲壮なド  
レット。亡くなったのは奇しく  
1616年だった。作品は近代西洋文学の原点ともなり、聖書に次いで世界で多くの言語に翻訳されている。



(同)

は、実に示唆に富んでいる。を抱えて風車に突進する型であり、その従者サンチョもいえる。

前編を、68歳のときに後編が1605年、マドリッドでドン・キホーテと優柔なハムもシェクスピアと同じ

物語は長編だがわかりやすく面白い。しかしながら、それをどの程度深く理解できるかは、読者の成熟の度合いにかかっているとも言われている。

さて、現実の今のスペイン広場。観光客が池や像の前で賑やかに代わる代わる記念撮影をしている。いつもと違う光景は、周囲が工事中のようになっていることだ。広場に沿った通りのキオスクの店員に尋ねてみた。

「そう、あれは地下鉄工事のための資材なんだ。世界からここに来てくれる観光客の皆さんには、ちょっと目障りだろうけど、もうしばらく我慢してもらわないだろうか。ドン・キホーテの時代から近代化へ。ここの交通渋滞を緩和してもらおう取り組みも大切だしネ・・・」

## カンボ・デ・クリプターナ

### ドン・キホーテが悪魔と見て格闘した風車群

ラ・マンチャの鉄道の要衝アルカサル・デル・サンファンに宿を定め、まずはカンボ・デ・クリプターナへ。いや、その前に泊まった宿について一言。

「ホテル・コンベント・デ・サンタクララ」。かつての修道院（コンベント）をホテルに改装したものである。なるほど、建物全体の構造といい、窓のつくりといい、何世紀も前の面影を忍ばせている。観光客に人気の国営ホテル「パラドール」の中にもかつて修道院だったホテルも多い。グラナダのアルハンブラ宮殿にあるパラドールなどは、人気が高く半年以上も前から予約しないと泊まらない。

本題へ。タクシーを雇い風車の並ぶ丘に上る。10基の風車が点在している。車から降りる。風が冷たい。風車が回るためには風が強いのは当然だろう。でも今はどの風車も回っていない。かつては風力を利用し、粉ひきに活用していたものだが、現在は完全に観光用と化している。

ドン・キホーテはこの風車を邪悪な巨人と信じ込んで戦いを挑んだ。



この時、あの大野には今もある粉挽場の風車が三、四十あらわれた。ドン・キホーテは、それに目をとめるやいなや、従士に言った。「天はわたちの仕事を、願ってもみられないほど上首尾に、運んでくださるぞ。それ、あそこを見なさい、サンチョ・パンサ。山のごとき巨人が三十ぴき、いや、もちっとじゃろうな、立ち現れたではないか。かれらと一戦におよび、みなごろしにしてくれよう……」

「巨人がどこに」と、サンチョ・パンサがきいた。「それ、あそこに見える長い腕のやつらじゃ」と、主人が答えた。「には、腕の長さ二里に達するのさえ珍しくないぞ」

「おめえ様、待ってくんせえ」と、サンチョ。「あそこにめえるは巨人でねえ。粉挽場の風車でがすよ。腕とめえるのがね、それ、風でまわって石臼を動かす、はねぎだあよ」

.....

（サンチョの止めるのも聞かずにドン・キホーテは乗っているロシナンテに拍車をくれ）一ばん手前の風車に突いてかゝった。すると、槍先がはねぎにふれるよと見えた時、にわかにかき起こった風が恐ろしい勢いではねぎを回転させたから、槍はぶち折れるし、馬と騎手はそっくりさらわれて、後方へばんと棄てられ、さんざんな態たらくで、野っばらところがついていった（永田寛定訳）

作品の全部を知らない人でもここだけは知っている。あまりにも有名なシーンである。

「ダダダダ・・・・」

マウンテンバイクに乗った若者三人が、風車の並んだ凹凸の激しい坂道をバイク音を響かせ駆け下りていく。丘の入り口の風車の一つが「観光案内所」になっていた。だが、閉まったまま。まだ午後4時なのに「きょうは祝日<イスパニアデー>だからお休み」という。

「なんということか、祝日だからこそ観光客も多く、そのアテンドをするのが当然ではないか」なんていきり立つのは、あまりにもまじめな日本人的な考え方か！

同行のサンチョ・パンサこと井部カメラマンはあちこちを動き回りレンズの角度を変えている。ドン・キホーテの私は運転手のペドロと談論。太った気の好い69歳。

「もう40年も運転してるよ。走った距離は100万キロを超えたかなあ。でも、今は仕事を息子に譲りつつあるんだ」

乗せてもらっているドイツ製のフォルクスワーゲンは2万ユーロ(約280万円)だった。高額な投資を回収するために、親子が時間交代でハンドルを握っているのだという。

夕方、風は更に強く、雲行きもあやしくなってきた。風車のライトアップされた写真が撮れるまでと思ったが、風邪気味のサンチョをかばって帰ホテル。翌朝、青空を狙っての出直しとなった。曇天だと風車の白い色が雲に溶け込んで浮き出てこない。「ラ・マンチャの青空がほしい！」と仕事熱心な我がサンチョ。

翌朝。雲ひとつない“ラ・マン案内所も開いていた。2人の女子取りをしている。受付の横には、マンチャの男」のポスターも貼っ合間を縫ってセニョリータに質「そう、日本からの観光客が圧倒



チャ晴れ”。今度は観光スタッフが電話でやり松本幸四郎演ずる「ラ・てあった。忙しい電話の問する。

的に多いわね。シーズンには1日平均4台の大型バスがやってくるワ。その次はフランスそしてドイツかしら・・・」

訪問ノートには、ぎっしりと日本人の署名もあった。どこまでも正義と理想を追い求めたドン・キホーテ そんな生き方の一端をここにきた日本人もつかんでくれればよいがナ、なんて思いがふと込み上げてきた。

## エル・トボソ

### 村長の“村起こし”、世界の翻訳書が一堂に

その昔、トボソ村のマルチネス村長は考えた。「何も無い貧しいわが村をどうしたら栄えさせていけるだろうか」。思案の末、思いついたのは、村が小説「ドン・キホーテ」の舞台であることだった。作品は聖書に次いで世界で最も多くの言語に翻訳されている。

「よし、世界中のドン・キホーテの翻訳書をここに集めて展示しよう」。村長はさっそくペンを取り、各国へ手紙を送った。

翻訳書は続々と届くようになった。国家元首、大統領、著名人の署名の入ったものが次々

と。トボソ村は一躍、「ドン・キホーテ」愛読家の訪問地となり、国の内外から観光客が押し寄せるようになった。人が集まる地は栄える “村起こし” 運動はすばらしい結実を見たのである。

10月13日、そのドン・キホーテ図書館を訪ねた。朝の早い時間ということもあって、他の訪問客もなく、館長自らが案内してくれるとの光栄にあずかった。

全部で54カ国語の「ドン・キホーテ」があるという。2階建ての各階の陳列棚には言語別の翻訳本とスペイン語による短い説明があった。私も翻訳された言語また寄贈してきた国家元首等のサインもわからない。でもスペイン語による説明文はわかった。アメリカのレーガン大統領、イギリスのサッチャー首相、フランスのミッテラン大統領、ポーランドのワレサ大統領、南アフリカのマンデラ大統領など。中にはイタリアのムッソリーニからのものもあり、歴史の一段面をのぞかせている。

ギリシャ語、ラテン語、ベルシャ語、ヒンズー語、ベトナム語、トルコ語、エスペラント等もある。館長は言葉を次いだ。「数日前には、南米のエクアドルからケチュア語で翻訳されたものが届いたんですよ」。スペイン国内でも、バスク語、カタルーニャ語、ガリシア語等の言語もある。

日本語の訳本へと急ぐ。2階の一角の展示棚。1927年の高田早苗による訳本。その横に「1928.5.28 テーホキ・ンド 譯伸上片」との表紙の訳書もあった。「日本語は左右どちらから書いていくんでしょうね？」と館長。「今は横書きなら一般に左から右へ。縦書きなら上から下へ。そして改行は右から左ですね」と手振りをまじえ、更に「日本語では、他にも永田とか会田また牛島とかの訳本もあるんですけど……」と私。

「ええ、私も訳者の名前は知っています。でも展示場所がないので別途に保管しているんです」。更にこちらがライターとカメラマンと知って「ところで村長にお会いになりますか？」と館長。思いもかけず、由緒ある村の村長さんに会えるなんてこんなラッキーなことはい。

「ええ、ぜひお願いします！」。 会見はすぐ近くの庁舎の村長室。ナティビダー・マルチネスさん。女性村長である。ジーンズにジャンパー。完全な仕事スタイルでテキパキと動く名村長とみた。 村の歴史、訪れる観光客、日本の最新事情等について話が弾む。いろいろと聞きかったが、突然の訪問で、多忙な村長の時間を費やしても申し訳ないので、20分ほどでおいとまする。

ここから100メートル先にはドルシネアの生家があった。ドン・キホーテは粗野な田舎娘アルドンサを高貴な淑女ドルシネアに仕立て上げた。正義の戦の報告をするためである。家は400年前からの農家。農具、家具、調度品などもある。ここも見学者が列をなし、受付で入場コントロールをしていた。エル・トボソの中央広場にはドルシネアにうやうやしくひざまづいているドン・キホーテの彫像もある。左が村庁舎、右が図書館



「ドン・キホーテ」は架空の小説である。でもその舞台が今、いろんな意義付けがされ世界中から見学者がやってきている。ここでも「最も多いのは日本人です」というのだが……。

### プエルト・ラピセ

#### 騎士の称号を得た旅籠は今レストランに

片田舎の郷土に過ぎなかったドン・キホーテは“正義の戦い”を進めるために、思い姫と共に騎士の称号を得ることが必要だった。「早くその儀式をしてもらいたいものだ」。サンチョ・パンサを伴い放浪の旅に出たドン・キホーテは、とある“城”を遠くに見つけた。

ドン・キホーテは、街道路を城砦、亭主を城主とおもいこんだから、城主の腰の低さがうれしかった。

.....

「しからは申しあげるが、てまえの所望に対して快く御承諾くださった一儀と申すのは、明日かならず、てまえに帯甲の式を授けられることじゃ。すなわち、今夜、てまえは、御城内の拝堂にこもり、甲冑を飾って、その寝ずの番をいたすが、明日こそ、申しあげたるごとく、かねての念願がかない、力弱き者のために冒険を求むべく、東西南北いずれの世界に向かうも自由なりと申そう。実に、このことは騎士道の任務にて、てまえども遍歴の士の双肩にかゝるもの。てまえどもの本懐もまた、かゝる功名を立てるにありますて」(永田寛定訳)

こうして井戸の上に甲冑を置き、夜中、不寝番をした後、城主(旅籠の主)より騎士への儀式を執り行ってもらうのである。

宿舎のあるアルカサル・デル・サンファンから西に約40キロ。ペドロの運転するタクシーでプエルト・ラピセの町を訪ねた。どこまでも広がるラ・マンチャの大平原。車は時速120キロ以上で走っている。でも、同じ光景が続いているせいかそんなに速くも感じない。道路の両脇には赤土の荒地に縦横斜めに列の揃ったオリーブの畑が延びている。一部の地域では収穫の終わったばかりのブドウ畑が続く。日本のように柵はない。短い株からつるが伸び実をつける。



途中で一時停車。オリーブの近接写真を撮る。白い粉のようなかげりを被った緑色の実がたわわになっている。この収穫は大変だ。大きな木の実には棒で叩き落とすのである。いまだに原始的な収穫法。機械でゆすり落とす方法もあるが、木そのものを傷めてしまうからという。一つの畑だけでも数千本。大変な作業量。そのため、海を渡ったアフリカのモロッコ等から大勢の季節労働者がやってくる、という。

車はプエルト・ラピセの「ベンタ・デル・キホーテ」の門の前で止まった。昔風の屋根のある門を入っていくと、中庭の奥に井戸と馬に水を飲ませるための石の貯水池、その隣にやせたドン・キホーテの像が立っていた。

その更に奥は 100 人余を収容するレストラン。中庭を囲む 2 階建ての家は、今は人を泊める状態にはなっていない。



午後 2 時。スペインではちょうど昼食の始まる時間だ。我々もレストランに入る。と、ここにも 20 人ほどの日本人グループ。大型観光バスでやってくる一行は、ほとんど全員がカメラを手に写真を取りまくり、土産品店では次々と買い物、食事も短時間でかっこむと一斉に風のごとく席を立てていく。ワインを飲みながら静かに懇談している何組かのヨーロッパ各国からの旅行者とはきわめて対照的だ。

さて、前例のない儀式が、かけ足の大きいそぎで済まされると、ドン・キホーテは、馬上に冒険をもとめるわが姿を想って、時刻を考えなかった。そこで、たゞちに、ロシナンテに鞍をおいて飛び乗り、上から宿の亭主に抱擁しながら、自分を帯甲の騎士にしてくれた礼を、筆にはつくしがたい珍口上で述べた。亭主は、早く出てゆかせたいため、おとらず気取った文句を使って、といっても、ずっと手短かに応酬したのち、はたご銭もとらずに、機嫌よく発させた（同）

我々も観光地化したせいか予想外に高かった食事代を払うと、降りだした雨の中を車に戻った。中庭はきっと夜になったら、不寝番をしたというそんな情趣が出てくるだろう。

ひとまずの我々の旅は終えた。作品の舞台で多くの市民とも対話を重ねた。スペインの学校でも「ドン・キホーテ」がほぼ必須の教材となっている。でも、私の会ったスペイン人で前編と後編を読み通したという人は極めて少なかった。今からすれば古典で、現代スペイン語とも違い難しいのかもしれない。

そのなかでの日本人の「ドン・キホーテ」への関心の高さ。それはこっけいな冒険譚（たん）もさることながら、狂気と言われながらも理想に向かって突き進む主人公のどこかに惹かれるものがあるからではないか。特に未来に夢を描くことが難しい現代の日本の社会にあっては・・・。

「人生自体が狂気じみているとしたら、一体本当の狂気とは何だ本当の狂気とは。夢に溺れて現実を見ないのも狂気かも知れぬ。現実のみを追って夢を持たぬのも狂気だ。だが一番憎むべき狂気とは、あるがままの人生に折り合いをつけて、あるべき姿のために戦わないことだ」

セルバンテス（ミュージカル「ラ・マンチャの男」＝森岩雄・高田蓉子訳＝より）

（完）

**清水 武** 1941年 長野県箕輪町生まれ。伊那北高校、早稲田大学卒業。NHK学園高校教諭、聖教新聞特派員を経て2001年に定年退職。2002年にはスペインのマラガ大学に留学。本年のSO（スペシャルオリンピックス）長野大会にボランティア通訳として参加。東京都昭島市在住。井部カメラマンは本年定年退職した筆者の友人。

\*このレポートは信濃毎日新聞の夕刊に、2005年12月8日から2006年1月12日まで5回に分けて連載されました。同紙面では構成上、記事・写真とも一部分が変わっています。